

『常民文化研究』の創刊によせて

2020年から22年にかけて日本はコロナ禍のまただ中にあり、日本常民文化研究所の活動も大きく制約を受けました。とくに所員の研究活動への制約は大きく、共同研究やフィールドワークなど調査研究活動は大きく制限されました。そうした意味では日本常民文化研究所の活動は停滞したといえるかもしれません。しかし、そうした時だからこそ、さまざまなことを創意し、新たな挑戦もおこなうことのできた年だったといえます。未曾有のコロナ禍のなか、日本常民文化研究所は創立100周年を迎えました。1921年にアチック・ミューゼウムとして発足して以来100年となります。また、1981年に神奈川大学の付置研究所となつてから数えて40年の節目にも当たります。日本常民文化研究所では、2021年から25年までの5年間で50周年をセンテニアル・イヤーズと位置づけ、さまざまな100周年記念事業をおこなっています。その一つに数えられるのが、日本常民文化研究所としては初となる査読誌『常民文化研究』の創刊です。

2020年、日本常民文化研究所では次なる100年に向けて将来構想を策定しました。その構想のなかで、日本常民文化研究所は二つの大きな柱を将来計画として掲げています。一つは、博物館機能の強化です。具体的には日本常民文化研究所を博物館相当施設として整備し、2022年度内に学内に「常民文化ミュージアム」を開設しました。そのように博物館機能を充実させることで、日本常民文化研究所はこれまでにない新たな博物館型研究統合を目指すこととなります。それは、拠点化により活発化する共同研究の成果について展示など博物館事業を通して広く社会に発信しようとするものです。

それに対し、もう一つの将来計画の柱は、2021年度で終了した国際常民文化研究機構が担ってきた共同

利用・共同研究の拠点としての機能を受け継ぎ、さらに発展させることです。国際的視野をもって常民文化を研究する機関として、積極的に共同研究を組織し、所蔵資料の共同利用を推進してゆきます。そうした共同研究・共同利用の成果として生み出される論考を学会のみならず広く社会へ発信する場として本誌は企画されました。それは、展示と対をなし、研究機関でありかつ博物館施設でもある日本常民文化研究所だからこそ可能となる社会への貢献のあり方であります。

2023年3月

神奈川大学日本常民文化研究所
所長 安室 知